

令和5年度 学校評価

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない ■ わからない

①いのちを大切にできる心の教育の充実といじめや不登校への細やかな対応

1 一人一人の児童生徒の尊重	2 道徳・心の教育の充実
学校は、一人一人の子どもを大切に指し導きや対応ができていますか。	学校は、豊かな人間性を育む心の充実に努めていると思いますか。(礼儀、生命尊重、思いやりなど)

○【一人一人の児童生徒の尊重】保護者・教職員は昨年同様、肯定的に捉えている割合が8割以上であるが、生徒の肯定的な割合が昨年度よりも増加している。今後も今以上に日常からの関わりを大切にしていきたい。○【道徳・心の教育の充実】保護者・教職員ともに昨年同様、8割以上が心の教育が充実していると捉えている。しかし、約10%の保護者が満足している状態ではないとも考えられる。教師が気が付かないところでつらい思いをしているかもしれないという危機感を常に持ち、今後も人権教育推進員を中心に情報発信を積極的に、毎週行われる道徳科の授業だけでなく、教育活動全体を通して、生徒たちの心を育んでいきたい。

②確かな学力の向上と社会の変化に対応した教育の推進

3 授業力向上	4 タブレット端末活用
先生方は、わかる授業、楽しい授業づくりに努めていると思いますか。	子どもは、タブレット端末を活用して学習していると思いますか。

●【授業力向上】教職員の意識の高さに対して、生徒や保護者がそれを実感している割合が低い。つまり、教師の意図が生徒や保護者に伝わっていないことが課題である。研究部を中心に生徒にとって学ぶ楽しさを実感したり、生活に生かそうとする授業改善を行い、通信等で周知していく必要がある。●【タブレット端末の活用】昨年と比べて、教職員の数値が向上している。要因として、学校訪問を契機に、全職員で公開授業に向けて授業づくりに取り組んだことで、タブレットを使うことが一般化してはいることが考えられる。これからは、教師だけではなく、生徒自身が学習の歩みをデータベース化し、個別・最適な学びを実現する道具として活用していきたい。また、引き続き、教育センター等の外部機関とも連携し、研究部を中心に効果的なICTの活用を模索したい。

③教員が子どもと向き合うための体制の整備

5 学校の支援体制	6 共生社会を担う人材の育成
学校は、支援を必要とする子どもの教育について、共通理解を図りながら取り組んでいると思いますか。	学校が行っている「交流及び共同学習」等は、相互理解につながっていると思いますか。

●【学校の支援体制】今年度は教育相談室の巡回相談も活用し、特別支援コーディネーターを中心に専門家の意見を参考にしながら、各学年・各学年において個に応じた支援に取り組んでいるが、そのことを保護者に伝える工夫が足りないのか、保護者の評価が十分とは言えない状況にある。中学校卒業後の生活を見据えて教育相談の充実を図り、本人や保護者とも十分連携してより良い支援体制の構築を進めていきたい。●【共生社会を担う人材の育成】LGBTQについての講演会等、各学年を中心に「交流及び共同学習」に関する取り組みを行っているが、教職員にとっては、更に相互理解を進めたいという希望が高いのか、昨年と比べて共生社会を実感する場面が少ないと捉えている割合が多い。コロナが第5類に移行し、様々な場面での交流や共同学習の機会を増やしていく方法を探していきたい。

④学習に集中できる教育環境づくりと安全対策の推進

7 安全と事故防止	8 家庭や地域との連携協力
学校は、子どもの事故防止などの安全教育に取り組んでいると思いますか。	学校は、家庭や地域と連携・協力しながら教育活動を進めていると思いますか。

○【安全と事故防止】昨年と比べ、生徒の意識が高まっていることに気づく。これは日頃から様々な機会を捉え、安全教育に取り組んできた成果とも言える。また、落雷によるエアコンの故障からの復旧作業やトイレの全面改修工事に生徒や保護者が接したことで、施設・設備の安全に対する関心や意欲が高まったからである分析でき、その結果、肯定的に捉えている生徒や保護者の割合が増加していると考えられる。今後も、危機意識を持ち、安全のための行動ができるような働きかけを行ってきたい。○【家庭や地域との連携】コロナが第5類に移行したことで、体育大会・若鷹祭・合唱コンクール・卒業式等において、保護者や地域の方々に少しずつ学校に来ていただく機会が増え、連携・協働する雰囲気が高まったことが、数値的にも上昇した要因であると考えられる。今後もこの新しい生活様式に、家庭・地域との新たな連携の仕方を模索し、家庭や地域に信頼される学校づくりを推進していきたい。

来年度の具体的な取組について

○教育目標・方針については、誰でもわかりやすいキーワードを中心にまとめ、年度当初のPTA総会で説明するとともに、家庭や地域と連携した取組について理解と協力を得られるようにすることを基盤に、今年度同様、継続して学校・学年便り、ホームページ、PTA新聞、諸団体会合などあらゆる機会を通して情報発信を行う。
 ○校内研修を中心に、生徒の実態や学力状況を分析し、指導の工夫改善に努める。生徒にとってわかる・楽しい授業のあり方を模索する。また、基礎学力の定着に向けて、ICTの活用（ドリルパーク等）を通して授業改善とセットにして本年度以上に取り組む。また、この取組が家庭に伝わり、家庭学習の充実に向けた取組を継続して行い、家庭との連携を強固にする。さらに、道徳授業についても研究実践に協働して取り組み、学習形態の工夫や評価の充実を図り生徒一人一人の心を研す。

学校関係者評価

○家庭や地域との連携について、肯定的に捉えている人数の割合が昨年度より上昇している。これは、コロナが第5類へ移行し、各行事に保護者や地域の方々をお招きし、情報共有や連携ができるようになったことが要因であると考えられる。来年度は、集団宿泊訓練を4年振りに実施したり、ナイストライ事業の実施日数を拡大して行う予定である。行事等を通して成長した生徒の姿を保護者や地域に発信し、学校を中心とするネットワークの中で成果と課題を共有する場を多く持ちたい。
 ○道徳や心の教育の充実に対する生徒や保護者の評価が上昇している。しかし、約10%の保護者が満足している状態ではないとも考えられる。教師が気が付かないところでつらい思いをしているかもしれないという危機感を常に持ち、今後も人権教育推進員を中心に情報発信を積極的に、毎週行われる道徳科の授業だけでなく、教育活動全体を通して、生徒たちの心を育んでいきたい。
 ○学校の個に応じた支援体制について、今年度は教育相談室の巡回相談も活用し、特別支援コーディネーターを中心に専門家の意見を参考にしながら、各学年・各学年において個に応じた支援に取り組んでいるが、そのことを保護者に伝える工夫が足りないのか、保護者の評価が十分とは言えない状況にある。中学校卒業後の生活を見据えて教育相談の充実を図り、本人や保護者とも十分連携してより良い支援体制の構築を進めていきたい。
 ○授業力の向上について、教職員の意識の高さに対して、生徒や保護者がそれを実感している割合が低い。つまり、教師の意図が生徒や保護者に伝わっていないことが課題である。研究部を中心に生徒にとって学ぶ楽しさを実感したり、生活に生かそうとする授業改善を行い、通信等で周知していく必要がある。
 ○タブレット端末の活用について、昨年と比べて教職員の数値が向上している。学校訪問を契機に、全職員で公開授業に向けて授業づくりに取り組んだことで、タブレットを使うことが一般化してはいることが考えられる。これからは、教師だけではなく、生徒自身が学習の歩みをデータベース化し、個別・最適な学びを実現する道具として活用していきたい。また、引き続き、教育センター等の外部機関とも連携し、研究部を中心に効果的なICTの活用を模索したい。